

## 第百二十一話 サイレントネービーの苦悩と決意

海軍の3長官（頭職）は、連合艦隊司令長官、海軍大臣及び軍令部総長であり、この三職を全て経験した海軍軍人は、元帥海軍大将永野修身（兵28）のみである。この永野大将に関する評価は芳しいものではない。屈指の親米派でありながら、海軍統帥の頂点である海軍軍令部総長として、開戦に係る意志決定、開戦後の戦争指導において、厳しい評価を受けている。開戦前後の永野軍令部総長の言動を見てみるとサイレントネービーとしての面目が顕現しているようだ。御前会議後の挨拶文とされるものは、今なお我らの胸を打つので、それを最後に紹介したい。

- 1 軍令部次長を親独派から米国通の伊藤整一に交代させた。
- 2 北進論と南進論

独ソ戦（1941/6/22）切迫との報で、俄かに対ソ戦好機到来、北進すべしとする論（松岡外相等の主張）が急激に台頭した主張した際、永野は、南部仏印進駐を強く推した。

その後も対ソ戦には絶対反対を主張し、“対米戦においては、現在ならば勝利の可能性はある。然し、その機会は時間の経過と共に失われる。”と。

- 3 7月30日の天皇への上奏

海軍としては対米戦を望んでいない、日米交渉まともならなければ、打って出るしかない。勝算はと問われ、勝てるかどうか解りません。と率直に述べた。

大将の真意は奈辺にあったのかは不明だが、・・・統帥と国務を統括する立場の天皇に実態を知って欲しかったのか？ 慎重意見を述べるのは難しい中での発言だった。

- 4 ABCD包囲網に対する天皇への奉答

海軍としては対米戦を決断するならば早期に開戦した方が有利と述べた。

- 5 山本連合艦隊司令長官具申の真珠湾攻撃に対する永野軍令部総長の判断

真珠湾攻撃は投機性が高く軍令部内でも反対意見が根強くあったし、永野総長自身も、南方資源地帯の確保と漸減邀撃作戦を構想しており、余りにも博打過ぎると慎重だった。山本大将の辞職を仄めかした恫喝もあって、永野が折れたと云える。

- 6 「帝国国策遂行要領」（9月6日決定）策定に至る過程での永野大将の主張


会議では、以下のような発言を繰り返している。

①中途半端な態度で臥薪嘗胆しても、何の解決にもならない。②臥薪嘗胆ならば、腹を据えて米国に譲歩 ③戦うなら、今以外に戦機はない。戦った場合、国力上2年以後は自信がない。④首・外相には、開戦に至らないようにする覚悟と勇気があるかとも。

9月6日の御前会議後に統帥部を代表する形で述べた挨拶文（8項）

- 7 11月1日大本営政府連絡会議、その後の発言等

6項と大同小異の内容

 8 永野軍令部総長挨拶文「戦わざれば亡国と政府は判断されたが、戦うもまた亡国につながるやもしれぬ。しかし、戦わずして国亡びた場合は魂まで失った真の亡国である。しかして、最後の一兵まで戦うことによってのみ、死中に活路を見出うるであろう。戦ってよしんば勝たずとも、護国に徹した日本精神さえ残れば、我等の子孫は再三再起するであろう。そして、いったん戦争と決定せられた場合、我等軍人はただただ大命一下戦いに赴くのみである」と語った。

\*海軍は政治に拘わらず、関わりを持つのはただ海軍大臣のみであるとのサイレントネービーの矩をきっちりと遵守していた姿が窺われる。海軍が一致して反対すればとの思いも無きにしも非ずだが、テロや内乱を恐れたとの指摘もある。職分を頑なに遵守しながらも、大将の思いは複雑で、苦悩も大きかったろう。扱、日本精神は残ったか？永野の悲痛な叫びを我等は何と聞く！

（第百二十一話 了）